



町の子供は町で育てる

「3つの合言葉」元気・学び・会話

滑川町教育委員会だより

「学んでよかった町へ -チーム滑川での教育-」

子どものいのちを丁寧に育む

「命を大切に」に込められた意味

月の輪小学校 松島 風夏

私は学校で助産師さんから「たん生学」を学んだ。

助産師さんは、「先祖を十代さかのぼっていくと、二千人以上の人で成り立っている。その中の一人でも亡くなってしまうたら私達はいない」と言っていた。

たん生学の話をもに伝えると、にんしん中に助産師さんから聞いたことを話してくれた。「生まれてくるとき赤ちゃんは、外の世界に行けるように何万もの切り替えをいっしゅんの内にして生まれてくる。例えば、羊水から出て初めて肺呼吸をするとき、それは魔法のようなしゅんかんだ」と言われたそう。

昔は、現代と比べて子どもの死亡率が高くて、七才まで神の子としてあつかわれ、七才になったら一人前とされた。

先祖からつないできた生まれる前からの「きせき」、生まれてくるときの魔法のような「きせき」、生まれてからの成長していく「きせき」。この「きせき」の連続があつて私達は今生きている。「きせき」の連続は当たり前ではない。

悲しいことに、私と同じ小学生でも自殺して亡くなってしまふ子がいる。

私にも、これからともつらいことや悲しいことがあるかも知れない。でも「きせきの連続」で生まれてきたことを忘れないでいたい。自分のいのちを大切にしながら一生けん命生きていきたい。そして、私も未来に命をつないでいきたい。

十代からのメッセージより
(一部抜粋)

2月18日(火)、(一社)あんど様主催の講演会がありました。演題は、「思春期のいのちと性～胎児、新生児期育児の応用～」講師は助産師で健康科学博士の光武 智美(みつたけ ともみ)先生でした。光武先生は、中高生の望まない妊娠を目の当たりにしたことをきっかけに、望まない妊娠を予防するためには「自分を大切に育む」ことが重要であるというお考えから「胎児の成長過程を通していのちの大切さを伝える授業」を全国の小中高校で展開されている方です。講演では、○思春期とはどんな時期? ○月経と精通といのち(家庭でどう教えるか) ○思春期は本当に反抗期なのか ○胎児、新生児育児と思春期育児、といった内容を分かりやすくお話いただきました。「胎児が新生児になる瞬間、神様がいなかったらこんな変化はない」「思春期をうまく乗り越えればあとはそんなに困らない」「思春期は、ホルモンの変化が原因で心が揺れ動く時期である」「脳の発達を無視した早期教育は意味がない」などのお話が印象的でしたが、先生のお話の肝は、「胎児期、新生児期の育児を思春期にも応用すればよい」ということでした。胎児は母のおなかの中の温かく守られた安全な環境で育ちます。このことから胎児期の育児の応用とは、「いつでも親は子どもにとって安全な場所でありつづける」ということとなります。新生時期は、授乳、おむつ替え、同じ部屋で寝かす、いつでも抱っこするなど基本的欲求を充たす(だけ)の時期、子どもへのSOS(求め)に応じて世話をする時期でした。このことから、新生時期の育児の応用とは、「こどもの『ねえねえ聞いて・・・』を最優先する」ということとなります。

今回、光武先生のお話を伺って2つの考えが浮かびました。一つ目は、「命の大切さ」について今後とも子どもたちに考えさせたいということです。2月20日(木)には、滑川中学校で「がん教育」を実施しましたが、紹介した松島風夏さんのように命を大切にできる子どもを一人でも多く育てたいと思います。二つ目は、「子どもを丁寧に育てる」ということです。松島さんの発表にも「子どもは神の子としてあつかわれ」とありますが、かつての日本人は、子どもは壊れやすいもの、傷つきやすいものだと知っていましたので丁寧に扱いました。「聖なるもの」だと知っていましたので、子どもを「敬する」仕方をわきまえていました。現在でも、直感に優れた教師たちは、教育が子どもたちにとって外傷的経験になるリスクを感知して、子どもたちを傷つけないことを優先的に配慮しています。この姿勢が、子どもの命を大切にすることに他なりません。昭和25年度から7年間、宮前小学校の校長を務めた小川清太郎先生は、「菊作り 汝は菊の奴(やっこ)かな」(与謝蕪村)を学校経営方針に掲げていました。先人の知恵に学びたいと思います。

光武 智美さんは助産師さんです。助産師はかつては産婆と呼ばれていました。ソクラテスは問答を通して相手の無知を啓きましたが、この問答法のことを産婆術といいます。光武さんのお話を伺い、私自身、教育や子育てに関して重要な知見を得ることができました。

❀ 図書館さくらまつりを行います ❀

滑川図書館では、3月29日の第3回滑川さくらまつりの日に、図書館さくらまつりを実施します。図書館の周りはきれいな桜がいっぱい咲きます。ぜひこの機会に図書館にお越しください。図書館さくらまつりでは以下の内容を行います。

★ワークショップ(しおりづくり) 10:00~16:00 2階 読書室

*自分だけの素敵なしおりを手作りしてみませんか。随時参加できます。

★青空おはなし会 1回目 11:00~ 2回目 14:00~ 図書館南側

*満開の桜の下でのおはなし会です。桜といっしょにお話を楽しみましょう。



📖 3月のおはなし会 📖

3月12日(水) 11時~ 0歳~2歳向け

3月15日(土) 10時30分~ 3歳以上向け

予約の必要はありません。時間までに図書館1階お話コーナーにお越しください。

○ 図書館と館長のおすすめ本

3月の図書館のおすすめ本は「防災」です。最近の自然災害の発生状況から日本全体の大きな課題です。一人一人が備えるべきこと、果たすべき責任について考えておくことはとても大切です。

館長のおすすめ本は、「子ども」です。未来を担う子ども、かけがえのない子ども。滑川町は埼玉県でも出生率が高い町です。子どもたちの健やかな成長を、みんなで願いたいものです。

新シリーズ
第2回

「滑川町の歴史」 part 2

縄文時代の滑川町～草創期の土器

縄文時代は一般的に右表の6時期に区分され、約12,000年間続きます。

縄文時代には、縄文土器と呼ばれる世界の土器と比べても最も古い部類の土器が作られるようになります。土器は粘土をこねて器の形にし、乾燥させたあと焼いたもので、液体を入れることができ貯蔵具として使われただけでなく、煮沸などもできるようになりました。そして、水や多様な食物を煮沸殺菌することで、衛生的で豊かな食事をとることが可能となり、人々の生活は安定していきました。

滑川町では、羽尾にある打越遺跡で最も古い草創期の爪形文土器が見つかり、町指定文化財になっています。爪形文土器は人の爪や半分にした竹管などの工具を使って文様が付けられた土器です。滑川町でも縄文時代の幕開けとともに土器を作り、生活していた人々がいたということを物語っています。

草創期	約15,000年～約11,000年前
早期	約11,000年～約7,000年前
前期	約7,000年～5,500年前
中期	約5,500年前～約4,500年前
後期	約4,500年～約3,200年前
晩期	約3,200年～約2,800年前



羽尾打越遺跡の爪形文土器